

●論文

女性を含む新規就農者の経営満足度に関する要因分析

川辺匡介*・大江靖雄**

*東京センチュリーリース(株)
**千葉大学大学院園芸学研究科

Evaluation of factors influencing satisfaction of new comers to farm management: female operators included

Kiyosuke Kawabe* and Yasuo Ohe**

*Century Tokyo Leasing Corporation

**Graduate School of Horticulture, Chiba University

Abstract

This paper quantitatively investigated factors influencing satisfaction of newcomers to farm management by an ordered logit model. Data were collected by a web-based survey of newcomers to agriculture, including female farmers, whose satisfaction and complaints have not been studied fully. Results revealed that factors indicating an interest in agriculture before entry into agriculture and the sense of reward after entry raised operator's satisfaction with farm management. In contrast, those newcomers who had longer years of farm activity after entry into management and who were female were less satisfied than those without these attributes. The reason for the lower satisfaction level of females was considered that they were busier doing household chores while also performing farm duties than males. From these results, it is worth considering support measures for females on various aspects of life as well to induce female newcomers to agriculture. In addition to the intensive support presently provided to operators at the entry stage of agriculture, support measures should be provided over the long term for those who have passed the entry period.

Key words : new comers to agriculture, female farmer, satisfaction on farm management, ordered logit model
キーワード : 新規就農者, 女性就農者, 経営満足度, 順序ロジット分析

はじめに

近年, 日本の農業は担い手の高齢化や農業人口の減少などの問題に直面しており, 新規就農者の確保は今後の日本の農業がどのような方向に向かうのかを占ううえでも重要な論点となっている。また, 新規就農者のうち数年以内離農者が, 少なくないことも指摘されている(平成26年版食料・農業・農村白書, 2014)。他方で, 近年では後述する女性の新規就農者の増加もみられる状況となっている。

新規就農者に関する先行研究として, 江川(1999)は, 全国市町村へのアンケート調査結果から, 複数の就農ルートの整備の必要性を指摘している。澤田(2003)は, Uターン就農や定年帰農などの多様化する就農ルートの展開を考察している。また, 澤田(2013)では, 青年就農者給付金について「人・農地プラン」との関連から考察を行っている。山本・梅本(2011)では, 農家の後継者以外の第三者による経営継承の可能性について検討を加えている。

三宅ら(2006)は, 兵庫県を対象に, 小金澤・奥塚(2008)は宮城県における新規就農者の意識分析を行い, 藤栄・江川(2003)では全国調査結果を用いた新規就農者の成長要因の計量分析を行っている。

女性就農者を対象とした分析では, 原(2011)は女性農業者の能力形成に焦点を当てている。波彦野(2012)では, 有機農業に従事する女性の新規就農者に焦点を当て, 農業観と生活観について考察を行っている。

しかし, これらの先行研究では, 近年増加傾向にあるといわれる女性新規就農者と男性新規就農者との違いを明示的に比較考慮した研究は, 女性就農者への期待が高まるにも関わらず十分なされていないとはいいたい。この点は, 今後さらに女性の新規就農者数の増加をはかるためにも, 重要な論点と考える。

そこで本研究では, 女性新規就農者も含めたアンケート調査結果をもとに新規就農者の経営満足度に対してどのような要因が関わっているのかを計量的に解析し, その特性を明らかにして今後の新規就農支援等への課題を展望する。

新規就農の現状

農林水産省では、新規就農者を次の3つに区分している。農家世帯員で主な生活の状態が自営農業への従事である「新規自営農業就農者」。新たに法人等に常雇いされることにより、農業に従事することになった「新規雇用就農者」。土地や資金を調達し、新たに農業経営を開始した「新規参入者」である。

農林水産省が2006年から2012年の期間に行った新規就農者調査によると、全国の新規就農者数は、2006年の8万1千人をピークに減少から横ばいの傾向にあり、2012年の調査では5万6千人となっている（第1図）。これは、新規就農者の大半を占めている「新規自営農業就農者」が2006年の7万2千人から2012年の4万5千人にまで減少していることが大きな要因となっている。

他方で、「新規参入者」についてみると、新規就農者に占める割合は小さいが、ここ数年では増加傾向もみられる。特に、39歳以下の新規参入者は2010年の640人から2012年の1,540人にまで増加しており、各年代と比べると最も伸び率が高い。これは、2012年に制定された青年就農給付金制度の影響が大きいと考えられ、このことから新規就農者に対する政策的な支援の重要性を指摘できる。

また、女性新規就農者については、最近年の具体的数字をみると11,020人（2010年）、11,810人（2011年）、12,020人（2012年）とわずかではあるが増加傾向もみられる（第2図）。その結果、新規就農者全体の約2割を女性が占めており、男性に比べてその割合はまだ小さいものの、農業への就農に関心を持つ女性の数が増加しつつあることは、否定できないといえる。このことから、今後農業が新たな女性の雇用の場とし

て重要性を次第に増すことも期待される。女性就農者への本格的な政策対応を検討する時期に来ているといえることができる。

調査方法

以上の新規就農者の動向を踏まえて、本研究では、新規就農を主なテーマとしてブログを開設している農業者128名及び、農林水産省が実施している「農業女子プロジェクト」のメンバー72名の方を対象とした。「農業女子プロジェクト」とは女性農業者を対象として、その活動を広報支援する農林水産省が主導するプログラムで、商品開発などで民間企業も協力している。本研究では、前段での考察を踏まえて女性新規就農者の増加傾向から、女性新規就農者の意識についても考慮する必要があると考え調査対象とした。

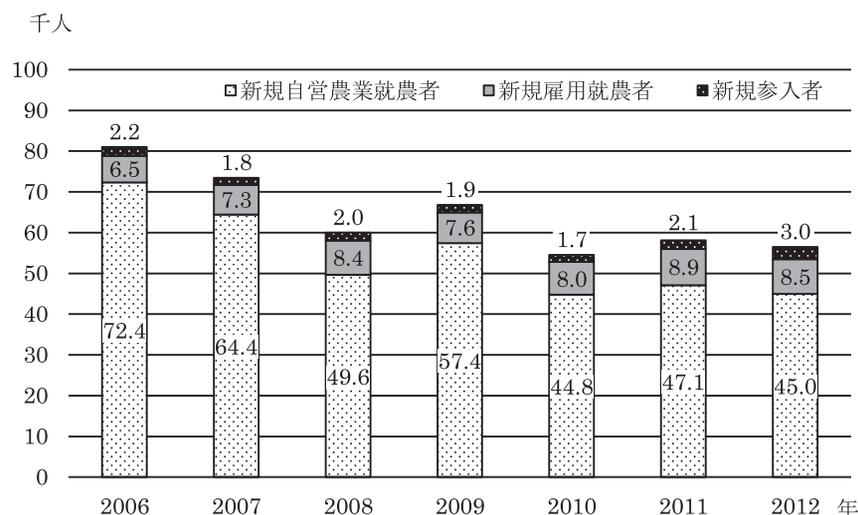
調査票は、グーグルフォームを用いてweb上で作成し、電子メールでアンケート調査票への回答を依頼した。回答者の属性や就農動機、経営意識に関する質問を設けた。回答数は49件で、性別でみると男性29名、女性20名であった（回答率25%、調査期間は2014年11月～2014年12月）。

分析結果

単純集計

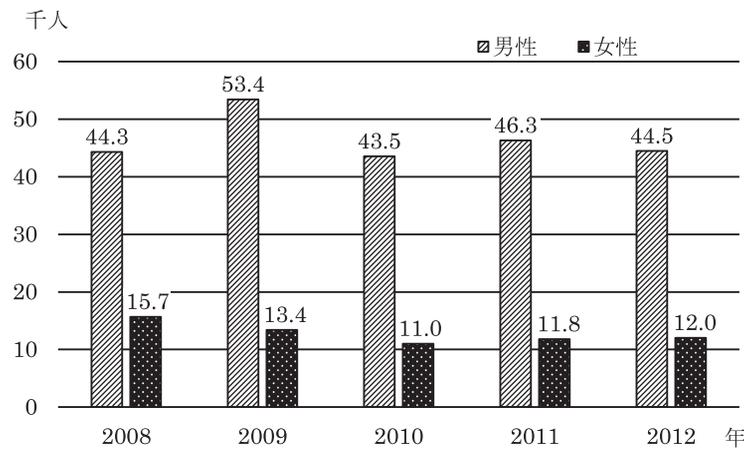
以下では、アンケート調査票への回答結果について、主な項目について考察を加える。まず、回答した新規就農者の就農経過年数は「1年未満」（10%）、「1～3年未満」（27%）、「3～7年未満」（37%）、「7年以上」（27%）という結果であり、その経験年数にかなりの幅が見られた。

新規就農の主な動機（複数選択）については、「農業に興味関心があった」（53%）、「農業はビジネスチャンスだと感じ



第1図 新規就農者の推移

出所：「新規就農調査」農林水産省（2006年から2012年）より作成。



第2図 男女別新規就農者の推移

出所：「新規就農調査」農林水産省（2006年から2012年）より作成。

た」(49%)、「自由度が大きく、自分の意志で経営ができる」(45%)などが上位であった(第1表)。

経営・生活面で苦勞したことについては、「収入が少ない」(67%)、「運営・設備投資資金の確保」(63%)、「販売先の確保」(53%)、「自然災害・天候不順」(53%)などが上位であった(第2表)。

現在の経営満足度(5段階評価)についてみると、「満足」(10%)、「やや満足」(31%)、「ふつう」(24%)、「やや不満」(20%)、とても不満(14%)という結果であった。満足度は分散していることから、「満足」、「ふつう」、「不満」の3

つに区分できることがわかった。

クロス集計(カイ2乗検定)

各項目間でのクロス集計結果について、カイ2乗検定により統計的有意差がみられるかどうかをみたが、多くの項目で有意差がみられなかった。そこで、有意差がみられた項目について、以下述べることにする。

まず、新規就農者の経営作目の違いと販売先との関係については、果樹作経営において主な販売先として消費者への直販を行っている割合が8割近くに達しており、統計的に有意に高い(10%水準)(第3表)。これは、果樹作経営では、果樹のもぎ取りや庭先での直売が行われていることが反映されているためと考えられる。このことから、果樹作経営を行う新規就農者では、市場外流通への依存が高いといえることができる。果樹作の新規就農者の市場外流通の取り組みは、直売のみならず、缶詰用などの生食外生産への取り組みもすでに指摘されている(菅野ら, 2013)。

また、男女別での就農後の意識の相違をみると、女性就農者において経営面での苦勞した点として「労働力不足」(58%)、生活面での苦勞した点として「休暇が取れない」(55%)で、それぞれ男性経営者と比べて統計的に有意な差がみられた(第4表)。つまり、女性就農者では、いずれも5割を超える割合で、これらの点に不満を持っているのに対して、男

第1表 就農の動機(複数回答)

項目	単位：%	
	構成比	
農業に興味関心があった	53.1	(26)
農業はビジネスチャンスだと感じた	49.0	(24)
自由度が大きく、自分の意志で経営ができる	44.9	(22)
家族といられる時間が長い	22.4	(11)
農村の生活が好き	20.4	(10)
前職が向いていないと感じた	12.2	(6)

注) () 内はサンプル数を示す。

第2表 経営・生活面で苦勞したこと(複数回答)

項目	単位：%	
	構成比	
収入が少ない	67.3	(33)
運営・設備投資資金の確保	63.3	(31)
販売先の確保	53.1	(26)
自然災害・天候不順	53.1	(26)
労働力不足	46.9	(23)
休暇が取れない	44.9	(22)

注) () 内はサンプル数を示す。

第3表 果樹栽培就農者の主な販売先の比較(カイ2乗検定)

経営作目	消費者への直販(直売所含む)		有意水準
	yes (30)	no (19)	
果樹	77.8 (14)	22.2 (4)	*
その他の作目	51.6 (16)	48.4 (15)	

注) 1. *は10%で統計的に有意であることを示す。

注) 2. () 内はサンプル数を示す。

第4表 就農に関する意識と性別の比較（カイ2乗検定）

項目		性別		有意水準
		男性 (29)	女性 (20)	
		経営・生活面で苦勞した点		
	労働力不足	yes 41.7 (10)	58.3 (14)	**
		no 76.0 (19)	24.0 (6)	**
	休暇が取れない	yes 45.5 (10)	54.6 (12)	*
		no 70.4 (19)	29.6 (8)	*

注) 1. *は10%, **は5%で統計的に有意であることを示す。

注) 2. () 内はサンプル数を示す。

性就農者では、7割以上が問題と感じていない。男女の意識差の違いが表われている理由は、男性と女性の家庭での役割の違いに起因すると考えられる。女性の場合は、農作業に加えて、家事や育児といった生活面での仕事も多いため、こうした不満を感じることであり易いと考えられる。以上の結果から、男女間での家事分担が十分なされていないことが示唆されるが、この点については詳細な分析が必要と考える。

分析モデル

上記の考察から、5段階で自己評価された経営への満足度を3段階に統合し、被説明変数とした（不満=1、ふつう=2、満足=3）。それに作用する要因を明らかにするために、順序ロジットモデルを用いて解析する（田中、2013）。具体的には、「就農前の意識要因」、「就農後の意識要因」、「回答者の属性」の3つの観点から説明変数を作成した。その理由は、クロス集計により統計的に有意となった要因を、説明変数として用いたことによる。

就農前の意識要因については、就農動機として「農業へ興味関心」（yes=1, no=0）を用いた。就農後の意識要因については、就農して良かった点の具体的変数として、「仕事へやりがいを感じるか否か」（yes=1, no=0）を用いた。また、就農後苦勞したことの具体的変数には、経済的要因の重要性から、経営・生活面での苦勞した点として「収入が少ない」（yes=1, no=0）、「運営資金・設備投資資金の確保」（yes=1, no=0）を用いた。

回答者の属性に関する項目については、数年以内離農者が少なくないという実態を踏まえて、就農後の経験の長さを示す変数を考慮した（就農年数3年以上=1, 3年未満=0）。また、前段で検出された男女間の違いが経営満足度に作用する事実を考慮して、本モデルにおいても検証するため、性別（女性=1, 男性=0）を考慮した。

さらに、農業生産に関わる要因である経営作目として、結果までに年数を要し、市場外流通の割合の高い果樹作（yes

=1, no=0）を考慮した。果樹作の生産技術の習得のむずかしさ（菅野ら、2013）や、傾斜地が多く作業負担が大きいこと（永沢、1966）など、果樹作に関する以前から指摘される点も考慮した。

分析結果

モデルの計測には計量経済ソフトウェアのStata12を用いた（松浦、2010）。計測結果は、第5表に示しているが、統計的に有意なパラメータが得られた点で、受け入れ可能な結果といえる。最小2乗法によるVIFを参考値として、算出したところ多重共線性の可能性はみられなかった。計測結果から、就農前の意識要因では、「農業に興味関心があった」が5%有意で正の値であった。就農後の意識要因では、「仕事にやりがいを感じる」が5%有意で正の値、「収入が少ない」が1%有意で負の値、「運営資金・設備投資資金の確保」が10%有意で負の値となった。回答者の属性に関する項目では、果樹経営が10%有意で負の値、就農年数が5%有意で負の値、性別変数が10%有意で負の値になった（第5表）。

考 察

就農前の意識要因については、「農業に興味関心があった」が正の値で有意になったことから、就農をするに当たって農業に対する興味関心が高いほど、就農後の経営満足度が高くなると考えられる。

就農後の意識要因については、「収入が少ない」、「資金の確保」が負の値で有意になったことから、資金や収入といった経済的問題に直面した人ほど、当然ながら経営満足度が低くなると考えられる。以上の結果から、経済的要因の重要性について、予想通り確認できた。

回答者の属性に関する項目では、果樹作経営が負の値で有意になったことから、果樹作経営者では経営満足度の低いことがわかった。先述のクロス集計では、果樹作経営の消費者

第5表 新規就農者の経営への満足度の要因分析モデルの計測結果（順序ロジットモデル）

被説明変数：経営満足度（満足=3，ふつう=2，不満=1）					
	説明変数	パラメータ	Z値	有意水準	VIF
①就農前の意識要因	就農動機：農業に興味関心があった（yes = 1, no = 0）	2.0266	2.37	**	1.30
②就農後の意識要因	仕事にやりがいを感じる（yes = 1, no = 0）	3.3257	2.40	**	1.16
	苦勞した点：収入が少ない（yes = 1, no = 0）	-5.3522	-4.13	***	1.01
	運営・設備投資資金の確保（yes = 1, no = 0）	-1.7090	-1.94	*	1.05
③属性	就農年数（3年以上=1, 3年未満=0）	-2.4848	-2.48	**	1.21
	性別（女性=1, 男性=0）	-1.9404	-1.92	*	1.27
	経営作物：果樹（yes = 1, no = 0）	-1.5819	-1.80	*	1.06

サンプル数：49
 疑似決定係数：0.4649
 尤度比カイ二乗値：49.20***

注) 1. ***は1%, **は5%, *は10%水準で係数が統計的に有意であることを示す。

注) 2. VIFは最小2乗法の計測結果から算出した値（参考値）。

への直販比率が高いことが確認されたが、販売単価は通常の市場出荷より高い傾向にあるため、販路面での要因では説明が付きにくい。この点についてはより詳細な分析が必要と考えるが、結果までに年数を要する果樹では、直ちに現金収入に結び付きにくいこともひとつの要因ではないかと推測される。

また、就農年数が負の値で有意になったことから、経過年数が長くなるにつれて、経営満足度は低下すると考えられる。これは、就農時には農林水産省が実施している青年就農給付金などがあるものの、その後の経営者能力向上に関する継続的な支援策がまだ十分でないことや、営農の厳しい現実直面する機会が増えるためと考えられる。

性別変数が負の値で有意になったことから、女性の方が男性に比べて経営満足度が低いことが確認された。先述のクロス集計で、女性と労働力不足の点及び休暇が取れない点での苦勞に関して、正の相関が見られたことと関連性があると考えられる。このことから、家事の面での女性の負担を考慮すると、農業は女性にとって肉体的に負担が大きく、かつ生活面での時間的余裕も少なくない点など、いわゆるワーク・ライフバランスを女性ほど取りづらい状況にあるため、経営の満足度の低さにつながっていると考えられる。このことから、この点での改善には農作業のみならず、生活面の負担の問題も併せて検討する必要がある。このように、女性新規就農者に関する研究蓄積は、十分とはいえないことから、今後その蓄積を図ることが有効な支援策の設計にとっても必要と考える。

おわりに

本研究の結果から、新規就農者の経営満足度に対して、資

金や収入といった経済的要因が大きく影響することが確認された。また、農業への興味関心・仕事のやりがいとの相関がみられたことから、農業への思い入れの強さが重要だということが再確認できた。

しかし、就農年数が3年以上経過している農家は満足度が低いことから、新規就農時の支援だけでなく資金調達能力や販売チャネルの開拓能力などの向上に向けた、継続的な経営者能力向上に向けた支援が必要であるといえる。

さらに、女性の農業分野への進出は重要な課題であるが、ワーク・ライフバランスが男性より取りづらいことによる、女性の経営満足度の低いことが明らかになった。今後は農林水産省が実施している農業女子プロジェクトのような女性就農者を対象とした支援活動をより一層充実させることなど、女性を含めた新規就農者の満足度の向上を図る諸要因について、さらに検討を加える必要があると考える。

摘 要

本稿では、女性の新規就農者を含めた経営満足度への意識的要因を、順序ロジットモデルにより分析した。分析結果から、就農前の農業への関心、仕事へのやりがい感、経営作物、就農年数、性別などが経営の満足度に作用していることが明らかとなった。経営満足度を高める要因として、就農前の農業への関心、仕事へのやりがい感が挙げられる。これに対して、経営満足度を低める要因として、果樹作の経営、就農年数、女性就農者であることが挙げられる。就農年数が長くなるとその満足度が低下することは、就農時のみの支援では不十分であることを示唆しており、さらに継続した支援策の検討も必要と考えられる。さらに、女性農業者の満足度が低い傾向にあるのは、生活面の不満も作用しており、この点での改善

を図るための支援策についても今後検討が必要と考える。

謝辞: 本研究で、調査にご協力いただいた新規就農者の方々、および農業女子プロジェクトの登録者の皆様に感謝申し上げます。また、内容改善に有益なコメントをいただいた、2名のレフリーの方々にもお礼申し上げます。

引用文献

- 江川 章 (1999)：新規参入者に対する支援体制の現状と課題：全国市町村アンケート分析結果，農業経営研究，37(1)：47-50.
- 藤栄 剛・江川 章 (2003)：農業における新規参入者の経営成長要因，2003年度日本農業経済学会論文集，35-40.
- 原 珠里 (2011)：女性農業者の能力養成とキャリア形成，(梅本雅編著) 担い手育成に向けた経営管理と支援手法，農林統計協会，117-135.
- 波多野豪 (2012)：有機農業新規就農女性の農業観・生活観—有機農業運動におけるジェンダーロールと消費者との関係性—，(原珠里・大内雅利編) 農村社会を組みかえる女性たち—ジェンダー関係の変革に向けて—，農山漁村文化協会，182-207.
- 菅野直樹・小松泰信・横溝 功 (2013)：高級果樹産地における新規就農者の定着条件—生食外用生産に活路を求めて—，農林業問題研究，49(2)：356-361.
- 小金澤孝昭・奥塚恵美 (2008)：農業への新規参入における地域定着条件—宮城県丸森町を事例として—，宮城教育大学紀要，43：1-10.
- 松浦寿幸 (2010)：Stataによるデータ分析入門，東京図書.
- 三宅康成・山崎勇志・榎本 淳 (2006)：新規就農の現状と就農者意識—兵庫県を事例として—，兵庫県立大学環境人間学部研究報告，8：61-68.
- 永沢勝雄 (1966)：果樹作における農作業研究—その背景と課題—，農作業研究，1966(1)：51-61.
- 農林水産省 (2014)：平成26年版 食料・農業・農村白書，農林統計協会.
- 澤田 守 (2003)：就農ルート多様化の展開論理，総合農業研究叢書第47号，農業技術研究機構 中央農業総合研究センター.
- 澤田 守 (2013)：青年就農給付金による就農支援と「人・農地プラン」(谷口信和編集代表，安藤光義・西山未真編) 動き出した「人・農地プラン」—政策と地域からみた実態と課題—，農林統計協会，89-104.
- 田中勝人 (2013) ロジット分析とプロビット分析
<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20130021/ecmr/logit-probit.pdf>
- 山本淳子・梅本 雅 (2011)：第三者継承による新たな農業参入の可能性，(梅本雅編著) 担い手育成に向けた経営管理と支援手法，農林統計協会，59-74.

(受付：2015年12月1日 受理：2016年2月4日)